RandoM

Rittor Music

SAX&BRASS magazine 特別号

Take Free

ホーンで勝負

Rittor Music

『サックス&ブラス・マガジン』主催

ライヴあり! コンテストあり! 一日限りのライヴ・イベント開催!

会場 live house 最寄り駅

代官山 LOOP

「代官山駅」より徒歩8分
「渋谷駅」より徒歩12分
http://www.live-loop.com/

東京都渋谷区鉢山町13-12 B1F

誌上企画コンテストの予選を勝ち抜いた
精鋭6組が大集結、ライヴ形式の
パフォーマンスでバトル!
実力派アーティスト達が
繰り広げる熱いステージも
至近距離から観戦可能!!

スペシャル・デー!!

熱烈ホーンズを堪能できる

サックス&ブラス・マガジン・フェスティバル2012

熱烈ホーンズコンテスト

SAX&BRASS magazine FESTIVAL

イベントホームページ http://port.rittor-music.co.jp/sbmf/

2012 9.16 日

OPEN 11:30 | START 12:00

TICKET (税込)

前売 ¥2,500
当日 ¥3,000

※入場時にドリンク代別途600円が必要となります。
※未就学児童、保護者1名につき1名様まで入場無料。

◇チケットぴあ http://t.pia.jp/ 0570-02-9999（Pコード 170-635）
◇ローソンチケット http://l-tike.com/ 0570-084-003（Lコード 78316）
◇e+（イープラス） http://eplus.jp

チケット絶賛発売中!

<主催／企画>リットーミュージック サックス&ブラス・マガジン <協力>代官山LOOP SLD Entertainment. Inc サンライズプロモーション東京
<お問い合わせ>サンライズプロモーション東京 0570-00-3337(全日10:00〜19:00)

サックス&ブラス・マガジン・フェスティバル 2012
熱烈ホーンズ・コンテスト

『サックス&ブラス・マガジン・フェスティバル 2012』の開催がいよいよ目前に迫ってきた。熱烈ホーンズ・コンテストの応募者の中から一次、二次審査をくぐり抜けた6組の精鋭ホーン・プレイヤーたち。彼らが最終審査の会場となる代官山LOOPのステージに立ち最終審査会に挑む。ここでは『サックス&ブラス・マガジンフェスティバル 2012 ～熱烈サウンド・コンテスト』の内容の詳細をお伝えしよう。

熱烈ホーンズ・コンテスト最終審査会

予選を通過した6組の管楽器プレイヤーが生演奏のリズム隊をバックに自慢の腕を競う!ライブ演奏ならではの思いがけないパフォーマンスが飛び出すかも……。

審査員:ファイヤー・ホーンズ(湯本淳希(tp)、近藤淳也(sax)、半田信英(tb))、坂本竜太(ベーシスト/プロデューサー)

ゲスト・ライブ:ファイヤー・ホーンズ
with 小林香織(スペシャル・ゲスト)

ゲスト・ライブには熱烈ホーンズ・コンテストの課題曲のアレンジ&演奏を担当したファイヤー・ホーンズが登場する。ベースにファイヤー・ホーンズのプロデューサー坂本竜太も加わった最強の布陣。さらに今回はスペシャル・ゲストとして小林香織が参戦。ファイヤー・ホーンズに小林が加わることで加わることで、熱いライブ・パフォーマンスになること間違いなし!

コンテスト出場者へ 小林香織からのメッセージ

「コンテストに参加されるみなさん、こんにちは! 小林香織です。コンテストに向けて、緊張感が高まってきているころでしょうか? 本番はその緊張感を楽しむぐらいの勢いで、自信を持って、強気でいきましょう! 間違えずに正確に演奏する事ももちろん大事ですが、最終的には、かっこよかったかどうか? 審査員やオーディエンスの心に留まるか? だと思うので、失敗する時も、かっこよく失敗しましょ♪……ってそれが難しいっていう話ですよね。えぇ。あと、ウソでもいいから楽しそうにするのも大事っ! 自分で自分を盛り上げるっていうのかな。みなさんが本番、悔いなく、かっこよく演奏できるよう、祈っています☆」

(小林香織)

ジャズファンク・セッション・スタンダード・スコア VOL.1
定価3,150円(税込)

ファイヤー・ホーンズのオリジナル・アレンジでジャズファンクの定番曲が楽しめるCD付きバンド・スコア集

ゲスト・ライブ出演者

ファイヤー・ホーンズ

プロフィール:2010年、スガシカオのライブサポートをきっかけに、湯本淳希(tp)、近藤淳也(sax)、半田信英(tb)の3人により結成されたホーン・セクション。JBズからタワー・オブ・パワーまで、王道を貫くキレのある演奏スタイルとパフォーマンスで存在感を発揮。昨年開催の「最強プレイヤーズ・コンテスト2011」ではオリジナルの課題曲を提供し、審査員も務めた。共演アーティスト:スガシカオ、bird、つのだ☆ひろ、ジャンクフジヤマ、など

坂本竜太(ベーシスト,プロデューサー)

プロフィール: R&B、70～80年代ソウルなどを知り尽くし、"グルーヴ番長"の異名を持つトップ・プレイヤー。自身のバンド"SPICY KICKIN'"の他、スガシカオ、小沼ようすけなどとも共演する。「ジャズファンク・セッション・スタンダード・スコア vol.1」の楽曲アレンジと総合プロデュースを務める。

小林香織

プロフィール:2005年のデビュー以来、人気を集めるサックス奏者。台湾でアップされたYouTubeのライブ映像の再生回数が500万回を越えるなど、世界でも注目されている。現在はソロ活動の他に、サックス・カルテットやガールズロックバンドBlack Berrysなどさまざまなプロジェクトを展開中。クリニックなども行っている。最新作は「7th」を最後に2012年4月母校である洗足学園音楽大学ジャズコースの講師に就任。

ビッグバンド・ファイルズ RandoM 特別篇

5分でわかるビッグバンドの歴史

History of Big Band

毎回、歴代のビッグバンドを1組ずつ掘り下げるサクブラの人気連載「ビッグバンド・ファイルズ」。今回はその特別篇として、ビッグバンドの歴史をわかりやすくご紹介しましょう。

文=桜木葵　イラスト＝岡安英樹

大衆娯楽の主役だったダンス そのバックバンドが起源

椅子というものの正式な起源が明確でないのは、それが座るためのものというひどく曖昧な定義であるためで、世界中のどこかで同時多発的に発生し、後に名称がつけられて発展（大量生産の実用品やアートなどへ）していったことは辞書や歴史書を繙くまでもなく感覚的にご理解いただけるでしょう。

ビッグバンドも椅子と同様、その定義が大人数によるバンドという曖昧なもののため、発生した明確な時期などについて詳しいことはわかっていません。けれど、1920年代には既に多くのビッグバンド、ラージ・コンボがしのぎを削っていたことなどから、起源としては20世紀初頭と考えていいようです。当時のバンドは鑑賞というよりも、娯楽のひとつとして隆盛を極めていたダンスのバックバンドとして必要とされていたものでした。テレビはおろかラジオも少なかったころ、ボール・ルームのような広い場所に大勢の人が集まりダンスを踊ろうとすれば、大きな音のでるバンドが必要になるのは当然です。そこでビッグバンドのように大きな音の出せる編成が生み出されたのです。

ラージ・コンボ的なものから、サックスが5本（アルト2本、テナー 2 本、バリトン1本）、トロンボーン3～4本、トランペット4本に、ギター、ピアノ、ベース、ドラムの4リズムという形態へ発展したビッグバンドは、ダンスの BGM としてスタートしながら、フレッチャー・ヘンダーソン楽団などの登場で、鑑賞を目的とした楽しみ方も少しずつ広まっていきます。

その後、1929 年にアメリカのウォール街に端を発した世界大恐慌の影響で、世界経済は大きな打撃を受けますが、その暗闇から回復しようとするように、街にはすばらしい音楽が溢れていました。アメリカでは禁酒法が施行されていたものの（1919～ 1933 年）、違法で強い酒を提供するバーは後をたたず、ニューヨークのハーレムにあった伝説のナイト・クラブ“コットンクラブ”などもそのひとつ。そこでは前述のフレッチャーのほか、デューク・エリントン、キャブ・キャロウェイ、ジミー・ランスフォードらオールスター・ミュージシャンが夜ごと出演し、オリジナルの楽曲を演奏し、客を沸かせていました。当時の賑わい、聴いたことのない音楽を味わう興奮、そんな風景を想像すると、胸が高鳴る人も多いのではないでしょうか？

1938 年にはクラリネット・リードによる優雅なサウンドで人気を博し“ スウィングの王様 ”とまで称されていたベニー・グッドマンのオーケストラが、クラシックの殿堂カーネギー・ホールで初めてのジャズ・コンサートを開催。ジャズという音楽の認知が、ビッグバンドという形態によって広められたといっても過言ではありません。

ビッグバンドの名盤9選

選盤／解説＝富士孔太

Count Basie『Basie in London』

数ある名作のなかでも最高傑作との呼び声が高い実況録音盤。エディ・ジョーンズ(b)、ソニー・ペイン(ds)、そして盟友フレディ・グリーン(g)を配した黄金のリズム・ラインは格別であり、ベイシー楽団ならではの猛烈なスウィング感溢れる白熱のステージが堪能できる。

Duke Ellington『The Popular』

1,000曲以上とも言われるデューク・エリントン(p)のレパートリー。その中からエリントン自らが厳選したヒット・ナンバーのみを再録音したスペシャル・ベスト的アルバム。ピアノによるご機嫌なイントロと、リッチなテーマがわくわくする「Take the A Train」もこのアルバムに収録。

The Buddy Rich Big Band『Big Swing Face』

ファンキーかつ豪快なプレイ・スタイルでシーンを駆け抜けた、"ドラムの神様"バディ・リッチ。ビートルズのヒット曲「Norwegian Wood」のカバーや、「Love for Sale」で魅せる息もつかせぬスピード感は圧巻!「The Beat Goes On」を歌う愛娘キャシーは実にキュート。

Maynard Ferguson『M.F. Horn 4 & 5, Live at Jimmy's』

驚異のハイノート・トランペッター、メイナード・ファーガソンの魅力はM.F. Hornシリーズに尽きる。中でも絶大な人気を誇るのが本作で、フルパワーで吹きまくる「Macarthur Park」と、「Left Bank Express」は秀逸。エキサイティングさでこの作品に勝るものはない!

◀スウィングの王様と称されたベニー・グッドマン

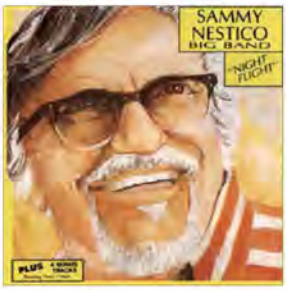
不況下での解散が続く一方 新しいスタイルも誕生

このように、グレン・ミラー、ベニー・グッドマン、カウント・ベイシーなど現在も愛されるビッグバンドの多くが誕生したことは、ラジオの普及と大きく関係しています。1939年に始まる第二次世界大戦と前後してラジオの技術革新が進み、軍用放送のほか、多くの音楽番組も放送されたことでビッグバンドのヒット曲が多く生まれ、ダンスのBGMとしての役割から鑑賞音楽へと発展を遂げていったのです。

人気バンドがひしめく中でも2大ビッグバンドと称されたのが、カウント・ベイシーとデューク・エリントンの両楽団でした。スウィング、ブギウギ、ジャイブといったダンスの要素と、ブルースやビバップのサウンドを取り入れたナンバーでヒットを送り出したベイシー。実験的なリズム、ハーモニーを取り入れながら聴衆を熱狂に引き込んでいったエリントン。タイプは異なれど、不況下や戦時中などの暗い時代に民衆を力づけるサウンドを奏で、人気を博しました。

大戦を挟み、給料を支払ってバンド・メンバーを雇用する形態をとっていた大人数編成のバンドの多くは、雇用主の経営不振や観客動員数の減少などのあおりを受け、活動を休止せざるを得ない状況になります。その影響もあり、ジャズの流れはより理論的で即興演奏を主とするバップへと移っていきました。とはいえ、スタン・ケントン、ウディ・ハーマンら新しいサウンドを持ったバンドが出てきたのもこの時代の特徴です。ビッグバンドはジャンルではなく、単にフォーマットを指す言葉、リーダーやメンバーの意思を伴って、さまざまな音楽を取り込んでいく自由さを持っているのです。1950年代に入ると、一時期活動を休止していたカウント・ベイシーが、サド・ジョーンズ、フランク・フォスター、フランク・ウェスといったプレイヤーを従えてシーンに戻ってきます。『April in Paris』『The Atomic Mr.Basie』などの名作を残したこの時期を、ベイシー・バンドの第二次黄金期とする人が多いことも、そのサウンドを聴けば納得できるでしょう。

▲2大ビッグバンドのひとつ、カウント・ベイシー楽団



Sammy Nestico Big Band 『Night Flight』

カウント・ベイシーとのコラボ・アルバム「Straight Ahead」の大ヒットでその名を轟かせた、作／編曲家サミー・ネスティコのリーダー作。ベイシー路線のスウィングだけに止まらず、コンテンポラリー、ラテン、更にはいぶし銀の泣きのバラードまで、多彩なサウンド・ワークが印象的。

Maria Schneider Jazz Orchestra 『Evanescence』

マリア・シュナイダーのデビュー作。唯一無二の独創的センスは、"音の魔術師"と謳われたギル・エヴァンスの愛弟子であることからも納得。美しくもスリルに満ちたハーモニーと、巧みなアンサンブルが織り成す９つのオリジナル楽曲が、ビッグバンドの新時代を感じさせた渾身の一枚!

Gordon Goodwin's Big Phat Band 『Swingin for the Fences』

世界最高級を誇るゴージャスさと、エンターテイメント性を兼ね備えた、比類なき凄腕集団。ディズニー音楽も手掛けるゴードン・グッドウィンの指揮の下、ウェイン・バージェロン (tp)、エリック・マリエンサル (sax) らが繰り広げる、縦横無尽なパフォーマンスは痛快爽快!

The Vanguard Jazz Orchestra 『Forever Lasting: Live In Tokyo』

前身のサド・ジョーンズ＝メル・ルイス・ジャズ・オーケストラが結成されたのは1966年のこと。以降、NYの老舗ジャズクラブ"ヴィレッジ・ヴァンガード"をホームに伝統と革新を追求してきた彼らが、2010年に行ったジャパン・ツアーの記録をCD化。綺羅星のごとき選曲にも注目。

Battle Jazz Big Band 『3rd』

超絶! 高速!ビッグバンド・プレイヤーなら誰もが憧れる２大テーマをもとに制作された、バトル・ジャズ・シリーズの第３弾。稀代の難曲「Explosion」でルイ・ベルソン役を演じる則竹裕之 (ds) をはじめ、エリック・ミヤシロ (tp)、守屋純子 (p) らのゲスト参加も作品に華を添える。

ジャンルを超えて注目される現代最高峰のビッグバンド

さて、ダンスのBGMとして成り立ち、ラジオというメディアを通じて大きく飛躍を遂げたビッグバンド・ジャズに、1950年代、またひとつの転機が訪れようとしていました。1941年からモノクロ放送の技術を改良してきたアメリカで、1954年にカラー放送が本格的にスタート。テレビという新しいメディアが、民衆の娯楽のひとつとして定着していきました。そんな中、1960年代に入りビートルズをはじめとするロックンロールが世の中を席巻。またマイルス・デイビスやジョン・コルトレーンを筆頭にジャズ・ミュージシャンたちがこぞってモードという手法を模索し始めると、ジャズは鑑賞音楽としてロックにその座を譲らざるを得ませんでした。

そのような時代にあって人気を博したのはバディ・リッチやルイ・ベルソンといった新しい時代のビッグバンドでした。彼らは時にロック・ビートを取り入れ、ビートルズの曲をアレンジしエレキ・ベースも導入するなど、時代の流れに敏感に反応しながら独自のサウンドで聴く者を魅了していきました。そのほか、デューク・エリントンが成そうとしていたビッグバンドのアーティスティックな一面を現代音楽的なアプローチでさらに推し進めたギル・エヴァンスや、カウント・ベイシーの下で研鑽を積んだトランペッターのサド・ジョーンズがドラマーのメル・ルイスとともに結成したサド・ジョーンズ＝メル・ルイス・オーケストラの存在も忘れてはなりません。

1970年代以降も、音楽の多様性に比例するように、数多くのビッグバンドが誕生しました。ケニー・ホイラー、ボブ・フローレンス、カーラ・ブレイ、近年でもボーヒュースレンやゴードン・グッドウィンなど優れたビッグバンドは枚挙に暇がありません。

中でも、現在最高峰のバンドのひとつと言われているのが、女性ピアニスト、作・編曲家のマリア・シュナイダーが率いるオーケストラ。ギル・エヴァンス、ボブ・ブルックマイヤーに師事した彼女は、緻密な描写で風景を切り取り、壮大なオーケストレーションへ仕上げる天才。2004年にダウンロード販売によってのみ発売したアルバム、『Cncert in the Garden』がグラミーを受賞するなど、その動向はジャンルを越えた注目を集めています。

このように、ビッグバンドというフォーマットは、時代を経るごとにさまざまに表情を変えて聴く者を楽しませてくれてきました。ここでは海外のビッグバンドしか紹介できませんでしたが、もちろん日本にもすばらしいバンドは数多く存在しています。これまで入手が難しかったLP時代の音源も続々とCD化されていますし、これからも面白いバンドが出てくるに違いありません。過去の遺産と未来を同時に体験できる私たちは、とても幸せな時代に生きているといえるのかもしれませんね。

対象 全楽器 全年齢

リットーミュージックの教則本

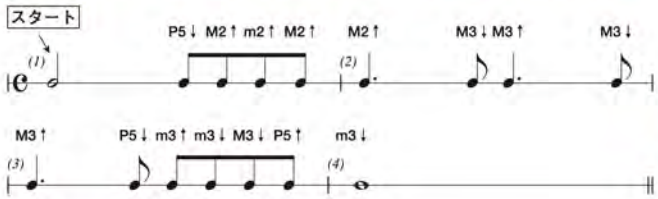
3万部突破大ヒット書籍第二弾は、

“絶対音程感”のトレーニングに特化!

“音程”が歌える、弾ける、聴き取れる!音感教育入門の決定版

1 いろいろな有名曲を分析して、音程を正しく歌うトレーニングをします。

続けていると、音程だけが書いてある譜面を見て、メロディを思い浮かべることができるようになります。

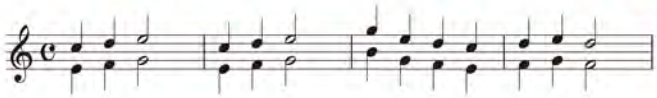


これは、あの曲か!

2 すると、未知のメロディを聴いて、どんな音程で構成されているか理解できるようになります。

このフレーズは長6度、短2度、長2度の音程だけで作られているな!

3 2音のハーモニーを聴いて、何度でハモっているか、わかります。



6度下のハーモニーか!

歌でも演奏でも、思ったとおりの音を探して出すことができるように!

大人のための音感トレーニング本

“絶対音程感”への第一歩!編

音楽理論を活用して音感コンプレックスを徹底的に克服する本

本書は、著者が提唱する第3の音感、“絶対音程感”(=周りの音に左右されず音程だけを確実に把握する能力)と、相対音感を身につけるための教則本です。音感の悩みは、突き詰めていくと“音程”を理解していないことが原因。本書に収録されたトレーニングを続けることで、今まで思いもしなかった能力が、面白いように獲得できるでしょう!

聴くだけで音感が育つCD付

■著者:友寄隆哉 ■定価:1,995円(税込)
■A5判/320ページ/付録:CD1枚
■ISBN978-4-8456-2100-2

3万部突破のシリーズ第一弾

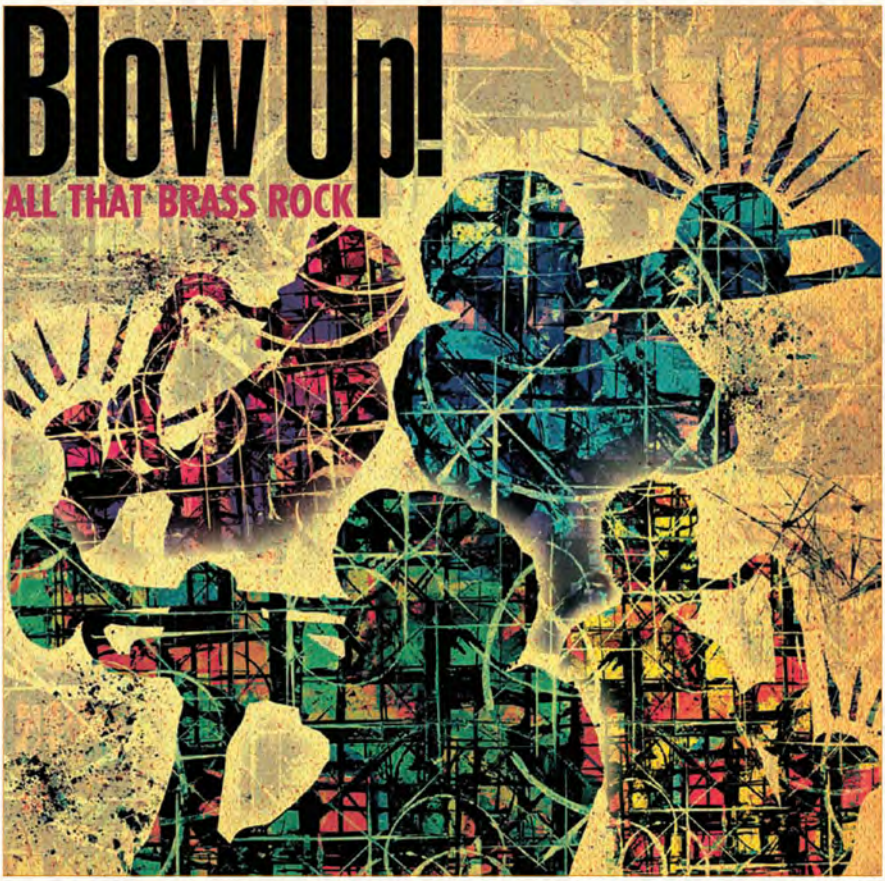
大人のための音感トレーニング本
音楽理論で「才能」の壁を越える!
定価:1,995円(税込)/付録:CD1枚/ISBN978-4-8456-1939-9

お問い合わせ&ご購入は
http://www.rittor-music.co.jp/store/
03-5213-9296(平日10時~12時、13時~17時30分)
e3@rm-store.jp へ空メールを送信、もしくは http://rm-store.jp にアクセス
※iPhone/Androidなどスマートフォンに対応しています。
RittorMusic www.rittor-music.co.jp

サックス&ブラス・マガジン選曲監修コンピCD

『Blow Up! —all that brass rock ブロウ・アップ！ブラス・ロックのすべて』

『血沸き肉踊る!』灼熱のサウンド—これがブラス・ロックだ!



2012年8月29日発売
2,000円 全16曲収録
ソニーレコーズ・インターナショナル

サックス&ブラス・マガジンが監修・選曲したブラス・ロックのコンピレーションCD『ブロウ・アップ! ブラス・ロックのすべて』が発売された。これまで本誌ではタワー・オブ・パワー、ジェームズ・ブラウン&ザJBズ、アース・ウインド&ファイアー、そして今号で特集しているチェイスなど、ホーン・セクションが主役でホーンが炸裂するバンドを特集し、その魅力を掘り下げて紹介してきた。このコンピレーションでは、それらブラス・ロック、ブラス・ファンクの名曲、名演奏16曲を一堂に集め1枚のCDに凝縮している。

このCDを通じて、ロックやファンクのリズムとホーン・セクションが融合することで生み出される高揚感、ドライブ感をぜひ体感してみてほしい。古今東西のブラス・ロックの名曲に触れることで、きっと今まで以上に、ホーン・サウンドの魅力のとりこになってしまうだろう。ここではブラス・ロックの名曲たちがどのように誕生し進化を遂げていったか、その歴史を紹介しよう。(編集部)

HISTORY OF BRASS ROCK

文:塚本 謙(Return Of Jazz Funk)

恐らく世界初であろうブラス・ロックをテーマにしたコンピレーションが発売されるという。なんと剛胆な企画だろうか。そもそもブラス・ロックとは文字通りロックのフォーマットにブラス・セクションを導入したバンド、またはそういうサウンド、の呼称にほかならないが、レコーディングやコンサートのバック・バンドにホーン・セクションがいるだけではブラス・ロックとは言わない。バンドの正式メンバーにブラス・セクションを含んでいるもの、そしてすべての曲でブラス・セクションがアレンジに基づいた意味ある働きをしているバンドこそブラス・ロックなのだ。しかしここ日本でブラス・ロックと言えばある時代の、ある種の共通性を持ったバンド群を指す言葉としての方が一般的かもしれない。その時代とは1970年を境に前後5年間くらい、場所はアメリカの大都市。さまざまなロックの多様性が試されていた時代、聴きやすくソウルフルな何かと迫力あるブラス・サウンドに飢えた人々にいっときの熱狂を与え、やがて徒花のように消えていったブラス・ロックの蜜月を中心的バンドとともに紹介、現代へつながるその普遍的な魅力に迫りたい。

シカゴが生んだ“黒い”ロック・サウンド

ブラス・ロックの代表的存在といえば何といってもシカゴだ。文字通りアメリカ中西部の大都市、シカゴで誕生したこのバンドは結成時からサックス、トランペット、トロンボーンというホーン奏者がそろっていた。むしろサックスのウォルター・パラザイダーによる願望——サックスだけどロックが演奏したい、という思いがこのバンドの熱源にあると言ってもいいかも知れない。若者らしい自由な精神性を感じさせるストレートなロック・サウンドと、それを鼓舞し肉付けするよう

なブラス・セクションとが産み出すホットなコンビネーションは広い層のリスナーをとりこにした。

このバンドを語るときに欠かせないのがブラス・ロックの立役者であるプロデューサー、ジェームズ・ウィリアム・ガルシオだ。フランク・ザッパのマザーズ・オブ・インヴェンションのメンバーだったこともある彼は、同じシカゴのグループ、ザ・バッキンガムズのヒットを手がけるなど実績のあるプロデューサーだった。パラザイダーと友人だったガルシオはこのバンドとブラス・ロックという新しいサウンドに大きな可能性を見いだす。かくしてガルシオのプロデュースのもとリリースされたシカゴのファーストはミリオン・セラーに輝く大ヒット。続くセカンド・アルバム以降もヒット曲を連発し世界的な人気バンドの仲間入りを果たした。

初期シカゴのサウンドはロックを基調としているものの表現は極めてソウルフルであり、ジャズやR&Bのエッセンスをたっぷり含んだものだった。同じシカゴのバンドにも共通の傾向が見られる。前述のザ・バッキンガムズはサンシャイン・ポップ的な白人バンドだったが、そのサウンドはホーン入りのポップR&Bというべきものだったし、バッキンガムズのサウンドに影響を与えた同郷のバンド、ザ・モブは白人によるR&B解釈といった趣のサウンドが特徴だった。ヒット曲「ヴィークル」で有名なアイズ・オブ・マーチもまたブラック・ミュージック特有の跳ねるようなビートを持ったブラス・ロック・バンドだ。これらシカゴの白人たちによる黒っぽいロック・サウンドは、南部から移住してきた黒人たちによるブルース、R&Bを育くみ、アメリカ北部最大の音楽的拠点でもあったシカゴという街ゆえに生まれた音楽的折衷だと考えていいだろう。シカゴでは常にブルースやR&Bがラジオから流れていたのだ。

ブルース・ロックから派生したブラス・ロック

ブラック・ミュージックからの影響をもっとダイレクトに表現していたのがブルース・ロックと呼ばれるジャンルのアーティストだ。白人ながらシカゴ・ブルースに入れあげたギタリスト、マイク・ブルームフィールドはハーピスト／シンガーであるポール・バターフィールド率いるバタフィールド・ブルース・バンドに参加、エレクトリックなブルース・ロックを演奏していた。が、脱退後1967年に結成したバンド、ジ・エレクトリック・フラッグでは“アメリカン・ミュージック・バンド”を標榜しブルース、ソウル、ジャズなど幅広い音楽性を取り入れたロック・サウンドを追求した。またブルームフィールド脱退後のバタフィールド・ブルース・バンドもバンドにホーン・セクションを加え、ファンキーさをパワー・アップさせたブルース・ロックで一世を風靡する。デヴィッド・サンボーンのデビューがこのバンドだったことは有名だ。

有名な白人ブルース・ギタリスト、ジョニー・ウィンターを兄に持つキーボード／ヴォーカリスト、エドガー・ウィンターもブルースからブラス・ロック的表現へと羽を広げたアーティストだ。70年代初頭に彼が結成したエドガー・ウィンターズ・ホワイト・トラッシュは兄のブルース表現から強い影響を受けながらもR&Bやジャズ的なサウンドを取り入れた独自のスタイルを形成、“アメリカで最もエキサイティングなライブ・バンド”と呼ばれるようになる。ソウル・ミュージックの力強さ、太さをロックというステージで平準化したようなサウンドは今聴いても熱気を帯びている。

▲タワー・オブ・パワー

ジャズ・ミュージシャンたちによるブラス・ロック

プロデューサー、ジェームズ・ウィリアム・ガルシオが手がけたもうひとつのブラス・ロックを代表する存在がブラッド、スウェット&ティアーズ(以下BS&T)だ。バンドの仕掛人であった才人アル・クーパーによれば、アイディアとしてバッキンガムズやそのプロデューサーであるガルシオ、そして当時のメイナード・ファーガソン・ビッグバンドにインスパイアされたらしい。フレッド・リップシアス、ランディ・ブレッカーといったジャズ畑のホーン・プレイヤーが集められバンドを結成、ファースト・アルバムはヒットを記録するもアル・クーパーは離脱。バンドの再編を余儀なくされ

収録曲はこの16曲!

文:編集部　ジャケットはオリジナル収録アルバムのもの

01

チェイス
「黒い炎」(ゲット・イット・オン)
サクブラ最新号の特集アーティストであるビル・チェイス率いるチェイスの大ヒット曲かつブラス・ロックを代表するナンバー。トランペット4本という奇抜な編成ながら、ビルのハイノート・プレイをフルに活かした熱いサウンドが特徴だ。

02

ジ・アイズ・オブ・マーチ
「ヴィークル」
のちにサバイバーでロッキー3の主題歌「アイ・オブ・ザ・タイガー」をヒットさせるジム・ピータリックが1966年にシカゴで結成。全米チャート2位を獲得。元レインボーのジョー・リン・ターナや日本のTOPSがカバーした名曲。

03

ブラッド、スウェット&ティアーズ
「スピニング・ホイール」
シカゴ、チェイスと並びブラス・ロックを象徴するバンドの代表曲。ジャズ、ロック、クラシックなどさまざまな音楽スタイルが巧みにからみあい、リズムが縦横無尽に変化する。間奏ではルー・ソロフ(tp)の名演が聴ける。

04

ザ・ブレッカー・ブラザーズ
「サム・スカンク・ファンク」
ランディ(tp)&マイケル(ts)のブレッカー兄弟にデヴィッド・サンボーン(as)加わった最強の布陣で、究極ともいえるスリリングなブラス・アンサンブルを聴かせる。ライブ作「ヘビー・メタル・ビバップ」のバージョンも必聴!

05

タワー・オブ・パワー
「ホワット・イズ・ヒップ」
西海岸を代表するファンク・バンド。バリトン・サックスを含む5管ブラス・セクションの奏でる分厚いサウンドが特徴。ドラム&ベースが独創的なスタイルを持つこの曲は、現在も彼らのライブにおいてアンコールの定番となっている。

06

メイナード・ファーガソン
「ロッキーのテーマ」(ゴナ・フライ・ナウ)
多くのトランペッターが崇拝するハイノート・プレイヤー、ファーガソンの超人気曲。この曲を収録したアルバム『征服者』は、テレビ番組『アメリカ横断ウルトラクイズのテーマ』として有名な「スタートレックのテーマ」も収録。

07

アヴェレージ・ホワイト・バンド
「ピック・アップ・ザ・ピーセズ」
スコットランド出身の白人ファンク・バンドによる1974年の大ヒット曲。テナー&アルト・サックスによるリフが印象的だ。後にキャンディ・ダルファーのカバーでリバイバル・ヒット。ジャズファンクのスタンダードとなっている。

08

クール&ザ・ギャング
「ジャングル・ブギー」
1969年より活動を続けるファンク・グループ。1973年発表の『ワイルド・アンド・ピースフル』に収録されたこの曲は、インスト・バンドであった彼らの初期の名曲である。その後ボーカルにJTテイラーが加入し、ヒットを連発することに。

▲チェイス

ていたところにガルシオが加わり、結果生まれたセカンド・アルバムはグラミーの年間ベスト・アルバムに選出されるヒットとなった。名曲「スピニング・ホイール」が入っているアルバムだ。

BS&Tのサウンドの特徴は彼らがジャズ・ロック・バンドと称されることも多いように、ジャズ、そしてクラシックからの要素の強さにある。リップシアスの非凡なブラス・アレンジやボビー・コロンビーの回転数の高いシャープなドラミングはジャズ的なサウンドの大きな要素だった。まるで彼らがロックではなくジャズの発展の過程で生まれたバンドであるかのように感じてしまうほどに。実際当時のジャズ・ミュージシャンたちが自覚的にブラス・ロック的なサウンドへアプローチしていったのも事実だ。

その最も有名な例がチェイスだろう。ウディー・ハーマン・オーケストラなどでハイノート・ヒッターとして名をあげたトランペッター、ビル・チェイスはトランペット4本のホーン・セクションをバンドの中心に据えたブラス・ロック・バンド、チェイスを生み出した。トランペットのハイノートとアンサンブルがボーカルさえ差し置いてサウンドの主役になるというこのバンドはリスナーの興奮を煽るようなサウンドで人気を得た。チェイスは特に日本で人気が高く、BS&T、シカゴと並んでブラス・ロックの代表的存在に挙げられるバンドだ。

アルバム1枚限りでBS&Tを脱退したランディ・ブレッカーは弟のマイケル・ブレッカーとともに再びジャズ／フュージョン寄りのロック・バンド、ドリームスに参加。その硬質でテクニカルなサウンドはのちのブレッカー・ブラザーズに継承されている。BS&Tに影響を与えたメイナード・ファーガソンも1960年代から70年代において積極的にロック・ビートを取り入れたひとり。ただしこの人の場合は新しいサウンドを創造しているという意識は少なかったと思うが。1970年代のフュージョン・シーンからは数々のロック的なジャズが生まれたが、中でもシーウィンドというバンドでデビューしたジェリー・ヘイ率いるシーウィンド・ホーンズはアメリカのポピュラー音楽界におけるファースト・コールとなった。こうしたロック、ポップスへのホーン・セクション導入の流れもブラス・ロックという現象が遠因になっている。

サンフランシスコを中心とした フュージョニズム

地域で言えばシカゴと並んでブラス・ロック的なバンドを多く産出したのが西海岸のベイ・エリア、サンフランシスコだ。もともと移民比率が高いこの地域特有の自由さ、おおらかさが人種の壁を越えたバンド編成や雑食・混血の音楽文化を育んでいたが、そういった環境はブラス・ロックのようなミクスチュア・サウンドを生み出すのには格好の土壌だった。ブラス・ロックというカテゴリーには収まりきらない存在ではあるものの、タワー・オブ・パワー（以下TOP）は人種のこだわりを感じさせない独特のブラス・ファンク・サウンドで世界的な人気を獲得したし、同様のスタイルではコールド・ブラッドも有名だ。またサンフランシスコが生んだファンクの革命児、スライ&ザ・ファミリー・ストーンが人種・性別の枠を越えて結成され、ロックやサイケデリックの要素を貪欲に吸収し続けたファンク・バンドであったことはよく知られている。スライ&ザ・ファミリー・ストーン解散後、サックス奏者であったジェリー・マティーニはルビコンというファンキー・ハード・ロック・バンドを率いた。

ロック側ではのちにシカゴのボーカリストとなるビル・チャンプリン率いるサンズ・オブ・チャンプリンもホーン奏者をバンドに含んだファンキー・サイケデリック・ロックを得意とした。またサンタナを頂点とした西海岸のラテン・ロック・シーンからは、アステカ、マロ、サポといったホーン入りバンドが誕生したが、彼らのサウンドはロック、ラテン、ジャズ、ファンクなどが渾然となった本当の意味でのミクスチュア・サウンドだった。

ファンク〜 ブラック・ミュージックの影響

ブラス・ロック・シーンとパラレルに並走するように、もちろんブラック・ミュージック・シーンにお

ザ・バッキンガムズ
「マーシー・マーシー・マーシー」

1966年シカゴで結成。ホーン・サウンドをいち早く取り入れたことで元祖ブラス・ロック・グループと扱われることも。インストだったキャノンボール・アダレイの人気ナンバーを、ボーカル曲に巧みにアレンジし大ヒットさせた。

ジ・エレクトリック・フラッグ
「キリング・フロアー」

ブルース・ギタリスト、マイク・ブルームフィールドを中心に結成。BS&Tやシカゴらより一足早く正式メンバーとしてホーンが参加。ブルース、ソウル、ジャズなどを取り込み、自らをアメリカン・ミュージック・バンドと称した。

アース・ウインド&ファイアー
「イン・ザ・ストーン」

人気絶頂期の1979年にEW&Fが発表した『黙示録』（I Am）のオープニング曲。壮大なファンファーレ風イントロが印象的。彼らお抱えのフェニックス・ホーンズと共に、本作からジェリー・ヘイがホーン・アレンジに参加。

スライ&ザ・ファミリー・ストーン
「アイ・ワント・トゥ・テイク・ユー・ハイヤー」

サンフランシスコ出身のファンク・バンド。スライ・ストーンをリーダーに、ファンクとロック、サイケの融合を試みロック好きのファンをも魅了した。女性トランペッター、シンシア・ロビンソンのソロ・プレイが実にクールだ。

アステカ
「ノン・バセム」

サンタナ出身のエスコヴェード兄弟（perc）を中心に結成されたラテン・ブラス・ロック・バンド。ラテンとファンクのリズムが行き来する中、中盤でフィーチャーされている名手トム・ハレルのトランペット・ソロが聴きどころ。

ザ・サンズ・オブ・チャンプリン
「ゴールド・マイン」

1975年発表の『サンズ・オブ・チャンプリン』に収録。後にシカゴに参加するビル・チャンプリン（vo、g、k）を中心にサンフランシスコで結成された。ビルのワイルドなボーカルを、ホーンがワンフレーズでグイグイ盛り上げる。

ザ・メンフィス・ホーンズ
「ホールド・オン」

数々のソウルの名曲を支えたウェイン・ジャクソン（tp）とアンドリュー・ラヴ（ts）のふたりがリーダーとしてバンドを結成。このザ・サンズ・オブ・チャンプリンのカバー曲は、1978年発表の『Memphis Horns Band 2』に収録。

ドリームス
「ニューヨーク」

ブレッカー兄弟が在籍したジャズ・ロック・グループ。トロンボーンでバリー・ロジャースが参加した3管編成。間奏でのの っけから炸裂するマイケルのテナー・ソロが聴きどころ。ここからブレッカー・ブラザーズに発展する。

いてもホーン入りバンドの歴史は更新され続けている。1960年代中盤のファンキー・ソウルの誕生とともにボーカル&インストゥルメンタル・グループと呼ばれる存在が各地で生まれた。ジェームズ・ブラウン率いるオーケストラを規範に、クール&ザ・ギャング、ザ・ファットバック・バンド、チャールズ・ライト&ザ・ワッツ103rdストリート・リズム・バンド、オハイオ・プレイヤーズなど、1960年代後半から1970年代初頭にかけて誕生したホーン入りバンドは枚挙にいとまが無い。

1970年代に入って以降、アース・ウインド&ファイアーがホーン入りファンク・バンドとして最も大きな成功と世界的なポピュラリティをつかみ取ると、バンドにホーン・セクションを加える、という選択はソウルフルな音楽を志すバンドにとってはむしろ必然の選択となった。ジェームズ・ブラウンのザJBズやスタックスのメンフィス・ホーンズなどはホーン・セクションだけで独立したバンド活動も行うようになる。イギリス出身の白人たちによるファンク・バンドではあるが、アメリカの音楽シーンで「ピック・アップ・ザ・ピーセズ」などのヒットを飛ばしたアヴェレージ・ホワイト・バンドは、ロック・リスナーにも受け入れられた存在と言えるだろう。

アメリカ以外のブラス・ロック

アメリカでの人気に呼応するように、1970年代初頭にはアメリカ以外の国からもブラス・ロック的なバンドが次々誕生する。中でもカナダのライトハウスはアメリカ産のブラス・ロックに引けを取らないソウルフルなサウンドで魅了した。もともとジャズ・ロックの文脈で独自の発展を見せたイギリスのシーンからはイフ、ゴンザレス、ニュークリアスなどプログレッシブな音楽性を持ったバンドが登場する。アフリカ出身のアフロ・ロック・バンド、オシビサもイギリス経由で紹介された。

ここ日本ではトランペット奏者である新田一郎が率いたブラス・ロック・バンド、スペクトラムとそのホーン・セクションであるホーン・スペクトラムが有名だ。スペクトラムはアース・ウインド&ファイアー的なサウンドとコスチューム、ステージ・パフォーマンスで6枚のアルバムを残すも2年で解散してしまった。その後、新田一郎はTOPSというホーン・ファンク・バンドのプロデュースも手がけている。最近では米米CLUB、東京スカパラダイスオーケストラに代表されるように数多くのホーン・セクション入りバンドがブラス・ロック的なサウンドで人気を得ており、ホーン・セクションもビッグ・ホーンズビー、スカパラホーンズとして活動しているのはご存知の通りだ。

現代へ引き継がれるブラス・サウンド

アメリカにおけるブラス・ロック・シーンは1970年代初頭に最大の盛り上がりを見せるが、その後1970年代中盤に向かってゆるやかに収束していく。チェイスはビル・チェイスの事故死により1974年で活動を停止。シカゴは人気を保ち続けるも1970年代後半以降はラブ・バラード中心のポップなバンドに様変わりし、1980年代にはAOR的なサウンドを得意とするようになった。BS&Tも5枚目のアルバム以降はよりジャズ/フュージョン的なサウンドへと変わっていく。ブラス・ロック・シーンの停滞の理由は諸説あるが、サウンド的な発展が乏しくマンネリ化に陥り気味だったこと、ジャンルを代表するようなスター・

▲メイナード・ファーガソン(左から2人目)

ミュージシャンの不在、そして何よりもホーン・セクションをバンドに加えるという営みそのものが決して斬新なアイディアでは無くなってきたこと、が挙げられるのではないだろうか。

しかし1970年代後半のディスコ期、1980年代のニューウェーブ期を通過した1990年代以降には再びブラス・ロック、ブラス・ファンクといった音楽スタイルの持つ力強さ、ポジティブさ、美しさへの認識が高まりはじめる。シカゴ、BS&Tといった大御所バンドも、かつてのクリエイティビティは無いものの精力的なツアー活動を続けているし、EW&F、TOP、クール&ザ・ギャングといったファンク・バンドも現役のファンク・レジェンドとして大いにリスペクトを集めている。加えてレア・グルーブやアシッド・ジャズ、ヒップホップといった若者の世界における1970年代サウンドへの信仰の高まりは、ホーン・セクション入りのバンドを続々と生み出すことに貢献していると言えるだろう。ブラス・ロックを聴くこと、演奏することの素晴らしさ、楽しみは普遍的なものとしてしっかりと現代の音楽シーンに根付いているのだ。

『血沸き肉踊る!』
灼熱のブラス・ロック名盤撰も発売

第1回発売タイトル　9月5日発売　各2,200円

コンピCD『ブロウ・アップ! ブラス・ロックのすべて』との連動企画としてソニーレコーズ・インターナショナルより、"ブラス・ロック名盤"8タイトルが紙ジャケット(復刻オビ付き)仕様で発売される。まず第1弾として9月5日にチェイス3作品、ブラッド・スウェット&ティアーズ3作品、アステカ2作品の8タイトルをリリース。チェイスの『ギリシャの神々(エニア)』『復活』と、アステカの『月のピラミッド』は日本初CD化となる。10月には第2弾の発売も予定されている。Blu-Spec CD、最新リマスタリング音源によりブラス・ロックの名盤を高音質で楽しむことができる。

チェイス
『追跡』

チェイス
『ギリシャの神々(エニア)』

チェイス
『復活』

ブラッド・スウェット&ティアーズ
『子供は人類の父である』

ブラッド・スウェット&ティアーズ
『血と汗と涙』

ブラッド・スウェット&ティアーズ
『3』

アステカ
『アステカ』

アステカ
『月のピラミッド』

SAX&BRASS magazine

サックス&ブラス・マガジン最新号

2・5・8・11月各28日発売
volume.24
2012 AUTUMN 税込定価1,575円

CD付

8.28発売!

豪華講師陣による新連載がスタート!!

●上級セミナー／秘伝の練習曲　スペシャル・インタビューも掲載!

●フラッシュ金子の実践ホーン・アレンジ講座

●勝田一樹連載コラム

巻頭特集

米米CLUBを支えるホーン・セクション

ビッグ・ホーンズビー

アーティスト特集

伝説のハイノート・トランペッター

ビル・チェイス

ビッグバンド時代～ブラス・ロック・バンド"チェイス"までの全活動を総括

エリック・ミヤシロがビル・チェイス奏法を徹底分析

バンド・スコア「OPEN UP WIDE」(チェイス)

偉人の肖像　**スタン・ゲッツ**

特集　ジャズファンク・アドリブはじめの一歩
～「カメレオン」を題材に～　講師:ファイヤー・ホーンズ

インスト企画　マウスピース座談会～ジャパニーズ・テナー・メタル

特別企画　プロに学ぶエフェクターの使い方

THE LEAD TRUMPET

アイオリア、アルテミスに続く、完全新設計の新モデル、「アフロディーテ」。
このモデルの開発にあたりベストブラスが掲げたコンセプトは「最先端のリードトランペット」。
極限まで軽量化した管体は、革新の HAMANAGA VALVE SYSTEM を搭載し、1(Kg) を下回る重量を実現しました。
圧倒的な音の安定感、スムースな吹奏感、そして、トランペットらしく輝く堂々とした音色—。
アフロディーテの誕生は、新たなライトウェイトモデルの幕開けです。

www.bestbrass.jp
株式会社ベストブラス　浜松市南区西町 314 PHONE: 053-401-5256

NEW BEST BRASS TRUMPET: APHRODITE MODEL

BEST BRASS

2012年度 秋期生、2013年度 春期生

入学願書受付中!

バークリー音楽大学との姉妹提携、
現役ミュージシャンによる個別指導が魅力!

バークリー音楽大学提携校
甲陽音楽学院

http://www.koyo.net

本科／留学本科／総合本科／一般・併修科／高校科

- **コンテンポラリーミュージックコース**
  エレキギター専攻／アコースティックギター専攻／ジャズギター専攻／ジャズピアノ専攻／ポピュラーピアノ専攻／キーボード専攻／エレキベース専攻／ウッドベース専攻／ドラム専攻／ヴォーカル専攻／サックス専攻／フルート専攻／トロンボーン専攻／トランペット専攻
- **作・編曲コース**
  ソングライティング専攻／コンポジション専攻
- **サウンドクリエイティブコース**
  ミュージックデザイン専攻／音響・レコーディング＆アートマネジメント専攻
- **クラシックミュージックコース**(6専攻)
- **ミュージックセラピーコース**(1専攻)

お問い合わせ
資料請求は
0120 FreeDial 0120-117540 イイナ コーヨー

KOBE 神戸本校
〒657-0059
神戸市灘区篠原南町5-4-1
Tel 078-882-5460
kobe@koyo.net

NAGOYA 名古屋校
〒460-0012
名古屋市中区千代田4-1-11
Tel 052-350-7530
nagoya@koyo.net

「今、役に立つ音楽、一生の仕事として続けられる音楽」

音楽のすべて19学科・垣根のないオープン・シラバスが「好きな音楽を仕事にする」を実現します。

Kunitachi Music Academy

国立音楽院

ドラムカスタマイザー科

リトミック本科

ピアノ調律科

先行出願受付中!
※9月より正式出願受付開始
説明会開催中
各学科定員数が御座いますので、下記へお問い合わせ下さい。

管楽器が好きで好きで
だから管楽器リペアラーを目指す。
音楽と技術の両方をみがいて
一生愛する管楽器と
共に生きてゆく。

音楽療法学科

ヴァイオリン製作科

ギタークラフト・リペア科

名演奏家の陰に名リペアマンあり
管楽器リペア科

♪充実の19学科

●管楽器リペア科
●ウインドオーケストラ科

- ●音楽療法学科
- ●リトミック本科
- ●アートセラピー科
- ●ピアノ科
- ●エレクトーン科
- ●ジャズミュージシャン科
- ●ロックプレイヤー科
- ●弦演奏科
- ●ミュージカルバレエ部
- ●和楽科
- ●ピアノ調律科
- ●ギタークラフト・リペア科
- ●ドラムカスタマイザー科
- ●ヴァイオリン製作科
- ●作曲アレンジ科
- ●シンガーソングライター科
- ●音響デザイン科
- ■中等部 ■高等部
- ■短期科（社会人のための1年コース）

♪講師陣133名

国内一流の奏者を始め、各分野のプロが実践指導。
マンツーマン・レッスンで一人一人の力を伸ばす。

♪資格取得

各学科で取得できる多くの資格、進路があります。

短期科（1年コース） 入学随時

■社会人コース ■中高年コース
新設 Wスクールコース
新設 音大生コース ～Diplomaコース～
新設 技術コース
ピアノ調律/ヴァイオリン製作/ギタークラフト・リペア/ドラムカスタム/管楽器リペア/音響デザイン

やりたい時間に集中して音楽力を極める

学校説明会（要予約）
※ご都合に合わせて対応いたします。
カリキュラム・入学に関して個別にご説明致します。
平日 12:00-21:00
土曜日・日曜日 13:00-
授業見学可能

CLICK 資料請求はコチラから!（学校案内ご請求は無料です）

●WEBで随時最新情報更新中!
パソコン www.kma.co.jp
モバイル www.kma.co.jp/i

twitter
@KMAofficial
http://twitter.com/KMAofficial

KMA 国立音楽院
0120 FREEDIAL 0120-987-349
〒154-0001 東京都世田谷区池尻3-28-8 [mail]contact@kma.co.jp

管楽器専門ショップ

Wind Crew

●管楽器のプロが揃えた、豊富な品揃え
これから楽器を始める方から上級者まで、管楽器に関するすべてに専門スタッフがきめ細かく対応。

●レッスンスタジオも完備
初めての方にも安心、レベルに応じたコースをご用意。

●安心のサポートシステム
ご購入後も楽器を常にベストな状態でご使用いただけるよう定期点検や無料調整を実施。あらゆるトラブルへ対応するリペア体制を完備。

管楽器専門ショップ ウインドクルー
【営業時間】
2F SHOP 11:00～19:30 土曜・日曜・祝日 10:30～19:30
3F 音楽教室 11:00～21:00 土曜・日曜・祝日 10:00～21:00
TEL.03-3366-1106 FAX.03-3366-1109
〒169-0073 新宿区百人町 1-11-22 リサビル2・3F
◇URL http://www.yamano-music.co.jp/

ウインドクルー別館リペア室
【営業時間】11:00～13:00 / 14:00～19:00
土曜・日曜・祝日 11:00～19:00
TEL.03-5337-1540
新大久保ビル3F（ウインドクルー向かい）

銀座 山野楽器 SINCE 1892

Sony Music Japan International Inc.

『血沸キ肉踊ル』灼熱サウンド

ホーンが炸裂する60〜70年代ロック／ファンクのすべてがコレ1枚で!
BS&T、チェイス、EW&F、ブレッカー兄弟などホーン隊による
名曲・名演だけを、SAX&BRASS サックス&ブラス・マガジンが厳選!

ブラバン・ティーンズも必聴

ブロウ・アップ! ブラス・ロックのすべて

解説:湯川雅宗(サックス&ブラス・マガジン編集長)／塚本謙　Blu-spec CD　SICP 20410 ¥2,000(税込)

2012.8.29 ON SALE

01 黒い炎(ゲット・イット・オン)／チェイス [1971]
トランペット×4本! ハイノート・ヒッターが憧れるエキサイティングな名曲

02 ヴィークル／アイズ・オブ・マーチ [1970]
多くのバンドにカヴァーされるブラス・ロックのスタンダード(全米2位)

03 スピニング・ホイール／ブラッド・スウェット&ティアーズ [1968]
熱いヴォーカル、シャープなどドラミング、そして5管ホーンの躍動感!

04 サム・スカンク・ファンク／ブレッカー・ブラザーズ [1975]
ランディ(tp)&マイケル(ts)のブレッカー兄弟+サンボーン(as)のスリリングさ

05 ホワット・イズ・ヒップ／タワー・オブ・パワー [1973]
史上最強のブラス・セクション! ヘヴィー級5管編成による痛快なアンサンブル

16 ロッキーのテーマ／メイナード・ファーガソン [1977]
彼こそMr.ハイノート! ブリリアントな音色と硬度はワン・アンド・オンリー

07 ピック・アップ・ザ・ピーセズ／アヴェレイジ・ホワイト・バンド [1974]
しなやかなサックスと小気味よいリズムの一体感。インスト曲ながら全米No.1

08 ジャングル・ブギー／クール&ザ・ギャング [1973]
聴けば踊らずにはいられない! ストリート感覚あふれるファンク・クラシック

09 マーシー・マーシー・マーシー／バッキンガムズ [1967]
ジャズの名曲に歌詞をつけたブラス・ロック最初期のナンバー

10 キリング・フロア／エレクトリック・フラッグ [1968]
ブルース、ソウル、ジャズ…多彩な音楽要素をミックス。ホーン隊もシャープ

11 石の刻印／アース・ウインド&ファイアー [1979]
世界一有名なホーン・セクションの超人気曲! ポジティブな高揚感が心地よい

12 アイ・ウォント・トゥ・テイク・ユー・ハイヤー／スライ&ザ・ファミリー・ストーン [1969]
ヒリヒリとした緊張感と攻撃的なプレイで文字通り"ハイ"な気分

13 ノン・パセム／アステカ [1972]
グルーヴィーなラテン・リズムの饗宴! トランペットは名手、トム・ハレル

14 ゴールドマイン／サンズ・オブ・チャンプリン [1975]
後にシカゴに加入するビル・チャンプリンが結成したブラス・ロック・バンド

15 ホールド・オン／メンフィス・ホーンズ [1978]
ソウルの名門、スタックスを支えた名ホーン・セクションが独立して結成

16 ニューヨーク／ドリームス [1970]
ブレッカー兄弟にB・コブハム(ds)らが加わったまさにドリーム・バンド

2012年9月5日発売 ブラス・ロック名盤選 第1回発売

完全生産限定盤 ¥2,200(税込) ■紙ジャケット仕様 ■Blu-spec CD ■2012年DSDリマスタリング

チェイス CHASE

追跡
Chase [1971]
(EICP20086)

ギリシャの神々(エニア)
Ennea [1972]
(EICP20087)

復活
Pure Music [1974]
(EICP20088)

ブラッド・スウェット&ティアーズ BLOOD, SWEAT & TEARS

子供は人類の父である
Child Is Father To The Man [1968] (SICP20411)

血と汗と涙
Blood, Sweat & Tears [1969]
(SICP20412)

3
3 [1970]
(SICP20413)

アステカ AZTECA

アステカ
Azteca [1972]
(SICP20414)

月のピラミッド
Pyramid of the Moon [1973]
(SICP20415)

第2回発売 10月10日発売予定 ブラッド・スウェット&ティアーズ、バッキンガムズ、エレクトリック・フラッグ、メイナード・ファーガソンなどを予定。

Rittor Music

www.rittor-music.co.jp/

デジマート www.digimart.net/

さがスタ studio-navi.jp/pc.html

ミュースク musicschool-navi.jp/

ミュースク レッスン musicschool-navi.jp/lesson/